

復讐慟哭シンフォギア

サルミアッキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

復讐者の曲には、死が宿っている……。

目次

復讐慟哭シンフォギア

一人の男がいた。

その人間は宮廷楽長だった。数多くの音楽家たちの師として尊敬され、音楽史に名を刻み……そして慟哭に満ちた灰色の軌跡をたどった者である。

—ゴットリープ……ゴットリープ……—

神に愛されし者と友誼を交わし……その友を羨み、だが実力を認め合った。神才の、偏屈で変態的な性格に振り回されながらも……それでも歌と音楽を愛し合い、研鑽し合った二人。

—私は……おおアマデウス……私は……—

だが現実残酷だ。魔女狩りの様に、風評被害はあつという間に広がって行く。不協和音……雑多な音律は、彼の脳裏と心に苦痛を刻み続けていた。

—私は……**■****■****■**、なのか……？私は、誰だ……？誰なのだ……？—

悪意ある中傷によって、在り方を捻じ曲げられた者。雑音ノイズまみれのこの世の中でただひたすらに無実の罪を訴えた。そして、燎原の火に焼かれて、歴史の影に消えていった……。

数年前、ロシア……—。

ヴァイオリンケースを担ぎ、一人の少女が雪原を行く。濛々と巻き上がる雪化粧の白粉。その吹雪の中から、微かな音楽が命に届く。

『……呼んでいる？……誰が。……でも、懐かしい声がする……』

雪原を走り、遂に至る。そこにあつたのは真つ黒の札。鎖に繋がれた長髪の男が描かれていた。

『……これは……？……つうツ!？』

謂われなき暗殺伝説によって存在を歪められ続けた彼の存在は、同じく神に愛されし者の最後にまつわる伝説『灰色の男』と……そしてこの世界の子孫と習合し、英霊として現界を果たす。

『あ……あああああああああああああああああああ!?!』

哀しきもの。怒れるもの。神の愛し子を殺すもの。

丁度吹雪が止んだ夜。見上げた空にはきらきら星が輝いていた。まるで、〃狼たちが住まう、永久に凍え付いた帝国〃の最後の夜の様に。そんな運命の夜に、『彼』と引き合いし人間とは……。

時は移ろい、現在。

人々は別の雑音に煩わされてきた。別の世界ならば英雄王が持つ宝物庫、その中からあふれ出る人類抹殺の為の怪物。

「……煩わしいな」

灰色髪の女がその音に向かって歩みを進める。縦縞の入った黒いスーツに、首筋に巻いた血の様に赤いスカーフ。どこか虚ろな瞳を前方に向けながら、一步、また一步と足を踏み出す。燎原の様な道路を歩いている。……前方からは我先にと逃げ去る民衆が。

「アマデウス……、ヤツはアマデウス……。奴らは忌まわしきアマデウスウウ……」

だが、彼女にそんなことは関係ない。人波を掻い潜り、彼女は再び『彼』となる。齒軋りと共に復讐の怨嗟をまき散らす。

「アマ デウスウウウウツ、モオオオオオツアルトオオオオオオオオツツ!!」

紅蓮の炎が溢れて出る。その姿は、仮面の男になっていた……。

「ハアアアアアアアア!!」

少女たちは血が通う歌で世界を護る。ノイズたちは己が身体を塵と化し、消える。だが、その時。

戦場に歌声では無く、鎮魂の曲が流れだす。

「何だ……この曲は……」

「モーツアルトのレクイエム？……！」

ノイズたちと戦っていた少女たちは、『それ』を見た。燎原の火に塗れた、救われぬ男の残滓にして復讐の音楽家を。指揮棒を振るう様に剣を振るい、怒りのままに殺戮をするその有様は、奏でる者達とは決して相容れない。

『オオオ……オオオオオオオオオ!! 殺す!! 殺すウ!!』

痛ましいものを見る眼で『彼』に顔を歪める少女、立花響。

『私は、殺さねばならぬ。奴を……神に愛されし者を……！』

「……そんなの、無いよ……」

『……、……?』

小首を傾げる様に少女を見る赤い外套の男。心底理解できない、と言おうように。

「そんな簡単に殺すなんて言わないでよ。話し合おうよ！私は貴方と……」

『……殺す』

ガングニールの少女の声を遮り、不気味なメロデイが赤黒い弦から放出した。

「コイツ、話通じないのかよ!?!」

音と共に、灰色の外套の集団が出現する。槍と猟銃を持った……伝説の亡霊たちである。

『殺す』

灰色の男たちが離散し、各奏者やノイズたちと混戦になる。その合間を縫って凄まじい敏捷性で接近してくる赤コートの怪人。その手で以って振るわれる剣は寸分たがわず……。

『殺す!』

「それはシンフォギアでは無いな……！」

ガリン、と酷く耳障りな音を立て、風鳴翼の刀と鏢迫り合いと相成った。

「お前は何を纏っている……!?!お前は一体何者だ!?!」

『……私は、死だ』

死に神は嗤う。現代に蘇った灰色の男は雑音共を薙ぎ払う。

『私は、神終わり告げるものに愛されしものを殺さねばならぬ』

防人の剣と死に神の剣が、その在り方を衝突させる。

『……我が名は “サリエリ” 』

「サリ……………エリ……………さん？」

『……………いや、違う！』

「ほへ？」

『私は……………私は一体誰なのだ……………——』